

平成26年度
横山利弘先生を囲む道德教育東京勉強会（報告）

府中市立府中第八中学校長

森岡 耕平

第1回勉強会 4月19日（土）参加者39人

<課題> 読み物資料「手品師」を活用した授業づくり

・参加者全員による自己紹介と日頃の道德教育への疑問等。グループでの資料検討。協議会と横山先生による指導・助言

○「私たちの道德」の活用について注意すべきことは何か。

→「人物探訪」や格言を取り扱って授業をする場合は、その背景をしっかりとつかませるが必要になる。厚みのあるその人の人生を読ませないで、格言の意味だけを追っても道德的な価値の自覚にはつながりにくい。

○「手品師」の授業づくりで深く考えることは何か。

→「約束」とは何か。それは、自分を将来に向けて拘束すること。「約束は守るべきである」ことをだけを教えればよいのか…。ここで「誠実」な生き方を考えさせることが大切ではないか。「誠実」とは「信頼」（未来への賭）と「信用」（過去の実績）に基づく。手品師の選択について様々な議論があるが、友人の「待っているよ」の電話の声が、少年の待っている思いを想起させ、受話器を持ち直し、大舞台の誘いを辞退する手品師の生き方を深く考えさせたい。

第2回勉強会 5月31日（土）参加者31名

<課題> 読み物資料「友の肖像画」を活用した授業づくり

・参加者全員による自己紹介と日頃の道德教育への疑問等。グループでの資料検討。協議会と横山先生による指導・助言

○深く考えるとはどういうことか。ねらいとする価値になかなかとりつけない。

→近頃の若者は、問題解決の思考が強い。行動の選択の判断基準が何か、各教科との関連を深め、考えさせる。道德の時間では、中心発問に時間をかけ、多様な子どもたちの意見を引き出し、受容した上で、深める問いを考える。そのためには、内容項目をしっかりと読み込むことも必要である。

○「友の肖像画」を考える視点

→この版画は正一くんの一年分の手紙であること。ぼくがじっと目をつむったまま考えたことは何か、そこから出てくる「ごめんね」の中身をさらに深く考えさせたい。

また、この資料の続編として「たとえぼくに明日はなくとも」がある。

第3回勉強会 8月30日（土）参加者42名

<課題> 読み物資料「言葉の向こうに」を活用した授業づくり

・参加者全員による自己紹介と日頃の道德教育への疑問等。グループでの資料検討。協議会と横山先生による指導・助言

○授業の山づくりについて

→資料の構図を読み取る。①自覚（変化）したのは誰か。②自覚（変化）をうながした出来事は何か（誰か）。③どこで自覚（変化）したか。その自覚（変化）したところで、どんな気持ちで、どんな思いで、どんな考えでいたのかを考える。

○「言葉の向こうに」を考える視点

→「寛容」とは何か。それは許す心であるといえる。画面から目を離して椅子にもたれた私が考えたことはどんなことだったのか、そこに授業の山をつくりたい。

第4回勉強会 10月18日（土）参加者38人

<課題> 模擬授業「二人の弟子」（川崎雅也先生）と研究協議

・参加者全員による自己紹介と日頃の道德教育への疑問等。模擬授業。授業研究と横山先生による指導・講評

○「二人の弟子」を考える視点

→人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがある。それはとことん自分をみつめてこそわかるもの。一番見たくないのが自分の心。でもその自分の本性、自分の姿をしっかり見つめていかなければならない。自分と向き合って生きていかねばならない。→智行と道信のそれぞれの価値の自覚について考えながら、いろいろな考えが出て終わってしまうのではなく、智行や道信の心を考えながら、それぞれの気持ちを語るだけでなく、自分の心とオーバーラップさせて、「自分の中にも、そんな弱さや醜さがあるよな」というところに気付かせたい。

第5回勉強会 12月20日（土）参加者38人

<課題> 読み物資料「メジロ」を活用した授業づくり

・参加者全員による自己紹介と日頃の道德教育への疑問等。グループでの資料検討。協議会と横山先生による指導・助言

○「向き合う授業」から「よりそう授業」へ

→子どもに寄り添う授業とは。たとえば、子どもが「先生、逆上がりができるようになったよ!」と、言ってきた時、「やったね!」とか「がんばったね!」と返すのは、子どもに向き合って話していることになる。「ね!」のひとことがそうさせている。その時、「やった!」と、子どもの気持ちを代弁することで、寄り添うことになる。

○「メジロ」を考える視点

→「生命尊重」とは誰にとっても、「生命」が「有限性（一回性）」・「連続性」・「偶然性」によるものであること。「畏敬の念」とは「こわさ」。かけがえのない命に関わる責任の重さ。死の絶対性と必然性。その「こわさ」は瞬間的なものであっても、後悔の念としてずっと心の奥底に残っていること。そのこわさを考えさせたい。

第6回勉強会 2月28日(土) 参加者32人

<課題> 中学校学習指導要領案についての検討

自己紹介後、小学校、中学校学習指導要領案をグループで読み込み、問題に思うことや理解しにくい点を指摘し合う。その後、横山先生からの指導・助言

1 道德教育をめぐる歴史的状況をどう捉えるか

- (1) パブリックコメントでは教科化に向けた指導要領案について賛成、反対が五分五分。
- (2) 一方に「(道德を) やってこなかった人」がいて一方に「やってきた人」がいる。その中で、誰もが道德をやることになる。(やらないわけにはいなくなる。)
- (3) 「とりあえず始める人」は当然うまくはいかない。いろいろやってみればよい。やりながら先生たちは何が良いか次のステップを探るようになる。
- (4) 「やってきた人」の中には、教科化に失望した人も多いが、この人たちで「これはおもしろい」と思えるような教科書を作成していきたい。

2 特別の教科 道德の目標の理解

「価値の自覚」から「価値の理解」へと変わった。目標の中にある「…道德的諸価値についての理解を基に」道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる授業づくりは2通りの解釈から考えることができる。

(1) 道德的価値そのものについての理解からの授業づくり

たとえば、「手品師」で、これまでの授業のプロセスに入る前に、「約束って何だろう？」とか、「守るべきもの、なんで守らなきゃいけないの？」など、「約束」の定義(将来に向かって自分と相手を縛るものなど)を理解すること(価値の理解)から授業に入っていく方法。

(2) 子どもたちの現状理解からの授業づくり

子どもたちの道德的価値に対する理解は、ゼロではない。「ゼロ」がどこかはわからないが「前理解」(浅い理解)から「理解」(より深い理解)にもっていく授業として、たとえば、「わがまま」と「自由」って、どう違うの? その区別を思うままにあげさせる。その上で、この2つを分けているものは何?などの問いから授業を展開する。この2通りの方法から、目標に迫る授業づくりを展開することができる。

3 新しい内容項目について

(1) 「主徳(しゅとく)」を捉える

これまでの1の視点、2の視点、4の視点の内容項目には、その「根本的な徳」(アリストテレス)、枢要徳(すうようとく)ともいわれるものがある。内容項目は22項目となり、配列、順序も変わったが、主徳に変わりはない。

1の視点の主徳 「誠実」 2の視点の主徳 「思いやりと感謝」

4の視点の主徳 「正義」

(2) 内容項目と発達段階

これまでの中学校の道德の内容項目は3年間を通して同様の内容項目とされてきたが、発達段階を考慮した段階付けが必要になる。

その1 「中学校に入学したばかりの一年生」という段階

その2 「中学生になった」段階

それを明らかにしなければ教科書が作成できない。

4 指導計画の作成と内容の取扱いについて

(1) 道徳の時間における指導方法の工夫について

「問題解決的な学習」や「道徳的行為に関する体験的な学習等」を適切に取り入れるとされているが、これらの工夫をすることは「指導のねらいに即して」と押しえられていることを読み落とさないこと。

つまり、「指導のねらい」である道徳性の育成について「判断力」、「心情」、「意欲態度」のどのねらいについても「よりよい生き方」について「生身の人間として深く考える」ための工夫でなければならない。

従って、道徳の時間で行う問題解決学習とは、生活上の問題解決ではなく、道徳上の問題解決であること。たとえば「二通の手紙」で、なぜ元さんが処分されることになったのか、そのことについて単にきまりを守ることが大切だなどの薄っぺらい問題解決ではなく、元さんが「この年になって初めて考えさせられたこと」とは何か、元さんが知った自分のあさはかさとは何か、そんな自分を処分した会社に対しても晴れ晴れとした思いにたった元さんの生き方に焦点をあてた問題解決の学習でなければならない。

(2) 評価について

「評価はおかしい。できるものじゃない。人間性の評価はありえない。」などこの種の批判は誰でもできる。だから道徳をやらないとすることが最悪である。評価の研究はこれからである。一人の人間の姿には、やる気に満ちているときもあれば、そうでない時もある。これをどう評価するのか、考えていかなければならない。

<今年度の勉強会を振り返って>

今年度も、読み物資料の活用とその授業づくりを中心に年間6回の勉強会を重ねてきた。平成30年度から小学校で、31年度から中学校で道徳の教科化が実施される。

本勉強会では、今後、多様な指導方法をありとして、それが子どもたちの道徳性につながるように教材の発掘、開発、指導案の再検討、再構築に取り組みたい。その中心的な課題として以下の4つの教材開発を考えていきたい。

①道徳的価値の理解に資する教材づくり

②自己を見つめるのに役立つ教材づくり

③多角的・多面的に考えるのに役立つ教材づくり

④人間としての生き方について考えを深めることに役立つ教材づくり